長野大学紀要　第18巻第1号　92—101頁　1996

戦後日本思想史の一側面——自伝風に

Certains côtés de l'histoire idéologique du Japon après la Grande Guerre II —— à la manière autobiographique

関　戸　嘉　光
SEKIDO, Yoshimitsu

皇国日本の無条件降服で、戦争は終わった。米軍を主とし首とする連合国軍の占領下に置かれた日本は、掌をかえすように、一夜にして万世一系の神国から只の日本国に変身した。

近所の植木屋兼業の農家の親爺さんが、何か手頃な庭木を譲ってほしいといって来た。進駐軍（と称していた）の軍人の住宅で必要なのだそうだ。椿の類はだめ、あれは毛虫がつく、アメリカのご婦人はひどく毛虫がお嫌いだ、といった。たかが庭仕事でも、進駐軍の仕事を俺はしてるんだぞ、といった優越感が露骨で、不愉快だった。「これからは万事マックワーサーの世の中だからね」とも彼はいった。

同じ日本人として私は情けなく思わぬではなかったが、それよりも、戦争が終ったという安堵感の方が圧倒的だった。東京は焼野原となり果て、処々にビルの残骸が点在するだけ。すっかり見晴らしがよくなって、地形がよくわかりますね、そんな冗談をいいながら地理学の多田文男先生と城北城西一帯の焼跡を散歩したことである。深く澄んだ秋晴れの一日だった。

横浜事件で笹下の拘置所にぶちこまれていた由田浩・姜大昌両君が有耶無耶のうちに釈放されて出てきたのは、確かその年その月の廿日の夜だったと思う。予定では翌廿一日と海野晋吉弁護士から連絡を受けていて、履物など用意して迎えに行くつもりでいた処だったので、喜びよりまず驚きだった。わが家の玄関に立ったときのその夜の二人の姿は、忘れられない。まさにあの世からただいま出てきましたという姿だった。頭はクリクリの坊主頭、白い浴衣を着て細紐で締め、冷飯草履という姿だった。

その夜は三人枕をならべて寝た。寝たといっても眠れるわけがない。つもる話もさることながら、二年余りの独房生活である、会話の機能が極度に抑圧されていた、その抑圧が突如除去されたのだ、堰をきったように言葉が噴き出す、当然である。とうとうその夜は喋りつづけて夜を明かした。

両君は二、三日（？）拙宅で休養して、それぞれ奥さんの実家へ帰っていった。そのときは亡者姿ではなかったと思うが、記憶さだかでない。記憶しているのは、わが親愛なるお天ちゃんの聖断のおかげで辛くも命びろいすることができた、その悪運強さを祝ってみんなですき焼鍋をつついたことぐらいだ。牛肉は闇で買った。敗戦で、闇まで支配していた軍官の特権と情実コネが瓦壊し、我々しもじもの庶民でも金さえ出せば大抵のものは手に入るようになったのである。

瀬尾（福田）裕君もその座にいた。彼は下宿先が疎開したため、私の家に転がりこんでいて、利根川の向うの取手に親戚があり、そこから何や彼や小さなリュックに担いで来てくれた。このときも葱など彼のご持参だった。みんな敗戦を喜ぶ連中ばかりで、座は大いに気勢があがったが、さて、これからの日本の進路は、となると、はっきりした見当は誰にもわからなかった。その点では、思いもかけぬ敗戦に呆然として虚脱状態に陥っていた大多数の日本人とあんまり違いはなかった。

それから一月ほどして、十月十日だった、政治犯、思想犯が一斉に解放された。これは、ＡＦＰの記者ロベール・ギランたちが、軍事政権下で非国民と断罪された人々がポツダム宣言受諾後の現

在もなお獄中にありつづけているという不法・不合理を全世界に報道として流した、その成果だった。徳田球一、志賀義雄らが府中刑務所から意気揚々、凱旋将軍よろしく出てきた。岩田英一は茹でジャガを捧げて迎えに馳けつけた（ご本人から聞いた話）。

三・一五で検挙されて以来だから、彼らにとって娑婆の風は十八年ぶりである。出獄後直ちに公表した声明「人民に訴ふ」が、天皇制打倒を第一に掲げる三二テーゼそのままだったのも、無理もない仕儀ではあった。天皇制は事実上すでに打倒されたのに何をいまさら、と思わないではなかったが、そんなことより、戦前の左翼運動の昂揚期が思い出されて、懐旧の思いの方がさきに立つのであった。

*

翌四六年一月、野坂参三が延安から帰国した。戦前戦中から岡野進の名で知られていて、私たちは、抗戦の英雄的人物として、尊敬と大きな期待とを彼に寄せていた。

同月二六日、野坂参三帰国歓迎大会が日比谷公園で催された。小雪まじりの寒い日だったが、押しかけた市民大衆の熱気で寒さなど吹きとんでしまうほどの大盛会だった（といっても、これは人伝てにきいた話で、私自身は出かけなかった。デモ集会の圧力のほどに無知だったので）。

野坂は「愛される共産党を！」と訴えた。そうだ！　それだ！　絶対主義天皇制下の非合法共産党ならいさ知らず、いまや、憎悪と復讐の時代ではない。私は、野坂の「愛される共産党」に、延安からもたらされた爽かな新風を感じて拍手を送った。

野坂の訴えは、理論的には戦略としての平和革命論であった。議会主義、改良主義であった。かつてのスターリン支配下のコミンテルンから、最も悪質な階級敵と断罪されたそれである。だが、いまや歴史の舞台そのものが転回（レヴォリューション）した。改良主義は、新たな歴史の舞台に新たな歴史的使命を担って再登場した、人類進歩の法則的常道として再評価された、と私はそれを理解して、明るい未来への希望をそれに托したのだった。

渡辺一夫先生の訳でヴィルドラックの『新しいロシヤ』[1]が出版されたのは、ちょうどその頃だった。戦時中、アンドレ・ジードの『ソヴェト紀行』・『ソヴェト紀行訂正』[2]の失望の書を読んだ私たちにとって、ヴィルドラックのそれは、まさに希望の書であった。ヴィルドラックは結論としての感想をこう述べている——

> ではあなたは、ソヴェト・ロシヤ国民の為に作られた生活に満足なさり、ロシヤに設けられた制度がフランスにも持ち来たされてほしいと仰しやるわけなんですな？
>
> このやうな質問に対し、先づ答へねばならぬことは、ソヴェト国民の現代の生活も、現行制度も、決定的な姿とは思はれぬといふことだ。両者とも、一年一年一日一日と、改善されていく。ソヴェト国民は、未だ完成されて居らない、現に建築中の家屋に住み、この家屋のなかで日に日に成長して行くのである。この家屋は、既に美しいものだし、その姿が、これを眺める者を興奮させると同じく、これに費される努力が、これの建造に従事する人々を興奮させてゐるのである。
>
> かうした前提の下に、私は、社会主義がフランスにもまたあらゆる国々に持ち来たされることを熱心に希望するし、今までも常に希望して来たのである。この制度の到来のみが、社会への寄生的生活や、人間同志の搾取や、金権万能や、暴力全能を終熄せしめ得るのだ[3]。

ヴィルドラックのこの歴史的展望は、同時に訳者渡辺一夫先生のそれでもあった、そう断言してよいと私は思う。最近公刊された『渡辺一夫・敗戦日記』[4]を読めば、それがはっきりわかる。無条件降伏の日からわずか十日後の串田孫一宛の葉書で「腐儒瓦全の志をとも角もとげた以上は、今度は玉砕の心を固めねばなりませぬ」[5]とある。大袈裟な決意表明など決してなさらぬ渡辺先生にしてこの言だ、よほどの重みをそこに読みとらねばならないだろう。

渡辺先生については、佐伯陽介さんの証言がある。東京高校で左翼運動に入った彼は、東大入学後まもなく検挙され、治安維持法違反で懲役二年執行猶予五年の判決を受け、復学を許されて追試受験のため経済学部の教授たちを挨拶廻りするが、ついでに東高での旧師渡辺一夫を仏文研究室

に訪ねる。そのとき渡辺先生は――

「君たちのおかげで、私の身辺まで危くなって来ているんだよ。何れは来るかも知れないが、それまでは頑張らにゃ。資金ぐらいだったら何とかするぞ」という。

「先生を危険にさらすわけには行かないな。カネの方は一応は間に合っているのですよ」

「そうか。頼もしいね。乾杯しよう」

昭和十七年に、こういい切れた文化人は数少なかったのである。その数少ない援助者の中に作家の太宰治と帝大病院にいた加藤周一がいた。彼らはカンパをしてくれたのである[6]。

渡辺一夫―ヴィルドラック―野坂の「愛される共産党」、こうつなげて、私は新しい時代の幕がいま揚がると感じた。それは、自由主義・民主主義と一体化した新しい社会主義・共産主義であるはずだ、と思った。あの鉄の規律を聖化するソ連型共産党支配ではなく、豊かな個性の開花を大きく抱き育てる共産党、支配ではなく奉仕する共産党、そんな共産党が夢ではなくなった。ロマン・ローランやアナトール・フランスそしてヴィルドラック、彼らを生んだフランスの共産党は、きっとそんな共産党にちがいない、そう私は信じていた。友人たちにもそう語って歩いた。

だが、これは、私の無知の故の大きな間違いだった。フランス共産党はスターリンのソ連共産党に最も忠実な、コチコチのボルシェヴィキー共産党だった。むしろグラムシの思想を継承するイタリア共産党こそ、私たちの期待する新しいそれであった。

もう一つ、中国共産党の勝利があった。これも私には、新しい歴史の開幕を告げるファンファーレと感じられ、希望に胸躍る思いだったのである。

蔣介石の国民党は厖大な新鋭兵器の援助をアメリカから受けていたにも拘わらず、朱徳・毛沢東その他大勢の中共および中共支持の農民兵の前に敗退した。中華民国にかわって、中華人民共和国が誕生した。共産党の指導する政権であったが、この新政権が掲げたスローガンは「新民主主義」あるいは「人民民主主義」であって、決して社会主義・共産主義ではなかった。（今堀誠二・新島淳良両氏によると、1949年10月中華人民共和国政府が出来たとき、政府のいかなる公式文献を調べてみても、社会主義革命などという言葉は見つからない、それが突然「中国は1949年以来ずっと社会主義革命をやっている」といい出す、ソ連との秘密の交渉、脅迫があったらしい、ということである）[7]。

なぜ「新」か、なぜ「人民」か。旧いブルジョア民主主義が自由競争・弱肉強食の民主主義であったのに反して、新しいそれは村落共同体の伝統を受けつぐ新しい相互扶助の民主主義だ、という意味での「新」であり「人民」である、そう私は勝手に理解して、双手をあげて賛成したのだった。

中共や紅軍八路のことは、戦前から、何処からともなく聞いていた。毛沢東の「持久戦論」なども大筋のところは伝わってきて、成程成程と心底から合点したのだった。八路の兵士は蓆一枚、箸一本でも農民から借りたものは必ず返す、などとも聞いた。その意識の高さ、道徳的品性の高さに唯ただ感服するばかりだった。戦後、左翼の文献が自由になり、エドガー・スノーの『中国の赤い星』[8]やアグネス・スメドレーの『中国の歌ごえ』[9]・『偉大なる道』[10]など完全な邦訳で読めるようになって、新中国とその指導者たちへの尊敬と信頼は私たちの間でいっそう確かなものになっていった。（スメドレーの『偉大なる道』は副題が「朱徳の生涯とその時代」となっていて、著者は紅軍と行動を共にしつつ隙々に親しく朱徳から聞き書きをとり、それを基にして作られた朱徳伝である。著者は朱徳という人間の人柄に心酔といっていいほどの敬愛を捧げている。戦後彼女はアメリカで赤狩りの弾圧をうけロンドンに亡命、そこでこの伝記を完成するが、出版に至らず、間もなくその地に客死した。原稿のまま残されたこの著作の公刊は1955年の阿部知二訳による日本語版が最初である。スメドレーは朱徳以下延安に拠った中共の指導者たちを「聖者の集団」といっている。彼女が中共をどんなに高く評価し、どんなに深く愛したか、これらの著作から、私たちはその感激を彼女とともにすることができる。遺言によって彼女は北京に葬られている。）

*

第二次世界大戦は人民の側の勝利に終わった。

独裁制は歴史の舞台から追放された。今や世界は民主主義、それもブルジョア民主主義でない人民民主主義の時代だ。哲学も、もうミーチン流のソ連的スターリン的「弁証法的唯物論」のまかり通る時代ではあるまい。そう私は甘く楽観して、無邪気にはしゃいでいた。さぞや傍迷惑なこともあっただろう。

量から質への転化、対立物の統一、否定の否定、この三つを弁証法的唯物論の三法則という、のだそうだ。ばかばかしい、何を勿体つけて法則などという必要があるのか。ただ事実を事実として在りのままに捉えなさい、というだけのことではないか。そんなこと遠のむかしにブルジョア科学者が初歩的な常識としたことではないか。さすがに元祖のエンゲルスはえらい。「フォイエルバッハ論」[11]で彼はちゃんとそういっている。「われわれ（マルクスとエンゲルス）は、現実の世界——自然と歴史——を、先入の観念論的な気まぐれなしにそれに近づくものにはだれにでもあらわれてみえるままの姿で、把握しようと決心したのであった」[12]と。別に驚くことも有難がることもない、ごく当たり前のことである。しかし、当たり前が当たり前に通らないのが、あの党派の世界である。当たり前のことを当たり前にいったエンゲルスは、やっぱりえらいとしなければならぬ。

その頃のことである、戦中から続いていた私たちの小さな哲学研究会・談話会で、順番が廻ってきて私が報告をすることになった。場所は目白の学習院大学の教室を借りた。集まったのは十名前後、誰々か名前はすっかり忘れたが、出隆先生が参加して下さったのはよく覚えている。報告なんていっても私の空っぽの頭では5分か10分で話すことが無くなってしまう、そんな報告で宜しいか、といったら、幹事役（これも誰だったか忘れた、この会の主宰山崎正一さんだったか）はそれでよしというので、お引き受けしたのだった。

日本精神、皇国史観は崩壊した、その空虚を充たすべく何か新しい心の拠り処を求めて、哲学や宗教への関心が昂揚した一時期であった。禅やカトリックや「絶対矛盾の自己同一」の西田哲学や『死に至る病』[13]のキルケゴールやサルトルの実存主義や、そんなあれこれの百花斉放のなかで、いちばん優勢だったのはマルクス主義・弁証法的唯物論であった。

戦前の「唯物論研究会」の理論家たちは地域の学習会などに引っぱりだこだった。彼らの話は、いつもきまって、唯物論か観念論かの対立から始まり、この両者の対立は人類の歴史、階級闘争の歴史における支配階級と被支配階級の対立の反映であること、支配階級を代弁する観念論は保守的反動的な役割を、被支配階級を代弁する唯物論は進歩的革命的な役割を果たしてきたこと、という結論に終わるのであった。

それが私にはどうしても承服できなかった。唯物論が進歩的だって？　観念論が保守反動だって？　少なくとも管見のかぎりでは、その逆の場合が多いではないか。その日の研究会で、私はそんなことを話した。マクス・ウェーバーと大塚史学とフランクフルト学派とくにF・ボルケナウ[14]のお粗末な受け売りだった。予想どおり10分もすると、話すことがなくなった。出先生が助け舟を出して下さった。「関戸君はあんなこというが、あれは、話を二段も三段も省略しての話で、論理的に順序正しく話すとすれば、唯物論の基礎的な意味から話さねばならないということになる。この基礎を誤ると、みかけばかり深遠難解で実は内容空虚な誤謬に陥る」といって、先生は私の異端の説を何くわぬ顔して庇って下さった。

マクス・ウェーバーのことが出た序でに、ここでちょっと脱線を許して頂きたい。

ずっと後になってのことである。武井昭夫さんから機関紙『思想運動』に寄稿を頼まれたことがある。「一冊の本」（？）とかいう見出しで、ひろく会員内外から毎号執筆者を替えて掲載するコラムに、である。お引受けして早速指定どおりの字数の原稿を送った。ところが、なかなか載らない。どうしたのかと思っていたら、だいぶたってから、新聞の最下段の隅っこに載った。それでわかった、武井さんずいぶん困ったのだな、できることなら没にしたかったのだな、そうもいかないから成るべく目につかない所に載せたのだな、と。それもそのはず、私が「一冊の本」に選んだのは、マクス・ウェーバーの『職業としての学問』だったのだから。

教師時代、私は担当科目が哲学であれ倫理であれ社会思想史であれ、講義の序論として必ずこの

『職業としての学問』[15]を紹介した。これは「魔法からの世界解放」(Entzauberung der Welt)をなしとげた西欧近代世界が、自ら樹立した合理主義、進歩主義そのものによって、いかなる運命を自らに負わねばならぬことになったか、という極めて現代的な課題を提起したものである。と私は思うのだが、唯物史観を批判してマルクスに対立したウェーバーだから、武井さんには許せなかったのだろう。

それはさておき、私は弁証法的唯物論が、そのスターリン臭を抜きにしても、どうも受け入れる気になれなかったし、またスターリンの存在自体が、あの大粛清もあって、何か暗い不気味なものに感じられたのであるが、にも拘わらず、地上最初の社会主義国ソ連邦とその国民とには兄弟的な親愛感を抱いていた。ヒトラーの兇悪な野望の餌食から人類を救った、という事実が目の前にあったからである。

アメリカもナチと戦った。太平洋では日本と戦って完膚なきまでに日本を叩きつぶした。確かにアメリカは自由と民主主義のために戦った。しかし私は、アメリカを究極的に平和志向の国とは思えなかった。否々、死の商人に操られる帝国主義の国、黒人と先住有色民族とへの人種差別が根強く残っている国、反共の国だ。到底「人類の平和」の実現を期待しうる勢力とは思えなかった。現在ではどんなに不完全であろうと、将来に希望を托し得るのは社会主義の勢力だろう、それに戦後は、ソ連型とはひと味ちがった社会主義の新風が生まれていることだし。

戦後しばらく、こんな調子の甘い考えで私は浮かれていた。友人たちが続々共産党に入党する。今は昔のような非合法時代とは違う、少数精鋭の前衛党ではない、お前のような鋼鉄の意志とはほど遠い者でも、平和と民主主義を志向するかぎり、党員の資格十分だと勧誘されて、義理にも入党せざるを得なくなった。推薦人は細川嘉六さん、住居が近所だった関係である。

その頃のこと、宮内璋さんがシベリア抑留から帰還して拙宅を訪ねてくれた。(彼は東大哲学科で私より2、3年後輩、現在はカトリックの南山大学名誉教授)。宮内さんは、自ら体験したシベリアの収容所の実状を話した。まさか、そんなことが、と私はどうしても信じられなかった。スターリンに反対の者がたくさん監禁され囚人労働を強いられているんだって？　そんなことありうるのか、そんなことで独ソ戦を勝ちぬくことなどできた筈がない、君は一部を見たにすぎないのではないか、私は宮内さんの話を、彼自身が体験したことだというのに、てんで信用しようとしなかった。

それが事実だと私にわかったのは、ずっと後のこと、ソルジェニーツィンの『イワン・デニーソヴィチの一日』[16]の邦訳を読んでからである。その後さらに十年あまりして、同じ著者の大作『収容所群島』全三巻[17]が公刊され、ソ連社会主義の恐怖的に非人間的な実状は、疑うべくもない事実となった。私はただ自分の不明を恥じるばかりである。

しかし、それは2、30年さきのこと、話を元の時点に戻さねばならぬ。

*

穏かな小春日和は束の間だった。平和革命だの新民主主義だの、甘美な夢は永続きしなかった。1950年初頭のコミンフォルム批判と同年六月の朝鮮戦争勃発とが、すべてを吹きとばしてしまった。

コミンフォルム批判は、野坂の平和革命論をマルクス主義とは縁もゆかりもない謬見と断罪した。爆弾的断罪だった。背後にスターリンの権威が控えている、日本共産党は恐慌状態に陥った。宮本・志賀・神山らの国際派と徳田・野坂・伊藤律・志田重男らの所感派とに分裂し、熾烈な分派抗争が始まった。中共からの強い指導勧告があって、国際派は屈服し、翌51年の日共第5回全国協議会で新綱領が成立、ここに分派は表面的には一応終熄、以後志田らの指導による新綱領を遵奉しての武装闘争へ突っぱしることになる。(火炎ビン・交番襲撃・山村工作隊・トラック部隊などである。翌52年のメーデー事件・新宿駅事件・吹田事件などがその頂点だった)。

だが、党内抗争はそれで終わったわけではない。むしろ逆に以前にも増して激しく陰険に酷薄になっていった。徳田以下の党中央が北京へ密出国したあと、国内でそれを指導したのは志田一派であった。二度の総点検によって、党中央に忠実

でないと疑いをかけられた者は反党スパイの容疑で査問され再除名されるのだった。私が査問の場に直接立会ったのは梅本克己問題のときだけである。それを記しておきたい。

梅本氏は、その主体性論などで、私たちの注目を引いていたが、それまで私は全く面識がなかった。彼もきっと正統的公式的弁証法的唯物論には慊らず、それが党中央にはお気に召さなかったのだろう。それで反党的と睨まれることになったのだろう。哲学者党員会議が招集され、梅本氏の査問が行われることになった。中央から歴史学者伊豆公夫（赤木健介）と経済学者川崎巳三郎の両氏が査問委員として来た。会議はそんなに険悪な空気ではなかった。和やかとまではいえないにしても穏かなものであった。梅本氏は、落ちついて余裕をもって、自分の考えと行動を報告説明した。列席の哲学者党員諸氏がどんな発言をしたか憶えていない。寺沢恒信さんが「自分は此処は意識的に日和見主義を決めこむ」といったのだけは憶えている。みんな大なり小なりそうだったのではないか。私は梅本氏を支持した。その場で「梅本さんの行動に反党的なことは何もない」といった。

そんなことはすっかり忘れていたが、ずっと後になって小島晋治さんに会ったとき、「梅本さんは、あのとき自分を支持してくれたのは関戸氏一人だった、と話していた」といったので思い出した。小島さんは梅本氏が水戸高教授だった頃の生徒である（東洋史学者、現在は東大名誉教授）。

さて、その新綱領の内実であるが、正式には51年綱領といわれ、スターリン直々の執筆で、アメリカの軍事占領下にある日本の現状を、他のアジアの植民地と全く同じと規定し、植民地解放・民族独立のための反帝・反封建の武力闘争を指示するものであった。そしてその戦術は、中共の抗日ゲリラをそっくりそのまま持ちこもうというものであった。今なら誰でも荒唐無稽と一笑に付するであろう。ところがそれが、日共五全協で満場一致で採択されたのである。討議討論の余地のない絶対的真理、神聖不可侵の至上命令として有難涙で戴いたのである。

そのとき私はどうしていたか。

私は、生来の官僚主義嫌いと無政府主義的気質とで、心情的には国際派分派に親近感を抱いていたが、国際派こそ最も国際的権威、スターリンまたは毛沢東に忠実であろうとするもので、もともと民族主義的傾向の強い私は、政治路線としては寧ろ反国際派的であった。要するに、理論的には私は何もわかってはいなかったのだ。これは私一人ではなかったと思う。

何かの会合のあとで、4、5人でコミンフォルム批判や九・三声明や新綱領のことなど、あれこれ論議していたら、そのなかの一人、石母田正さんが突如、「君たちは国際批判の重さというものがテンデ解ってない、そんな風に議論の対象にすること自体が、君たちが自由主義・個人主義を脱けきれずにいる証拠だ、国際批判は絶対だよ」と厳然と教え諭すようにいった。彼の目にはチラリと殺気のようなものが走った。私は思わず襟を正した。コムニストであるということはそういうことだったのだ、とそのとき更めて私は思った。戦前のあの英雄的コムニスト像である。

石母田さんには『歴史と民族の発見』正・続[18]という名著がある。それを読んで感心していた時だったので、特に彼の一言はこたえた。だが、私は彼の言に納得がいったわけではない。彼は、党のため真理のため一命を犠牲にすることができる、と同時に、そのために人を殺すこともできる。私は、どちらもできない。真理に一命を捧げることができないのは、私の臆病卑怯の故であるが、真理のためであっても人を殺すことができないのは、私の懐疑の故である。そんなことを考えたからである。これは今でも変わらない。

新綱領に関連して、堀江正規他編の『日本資本主義講座』[19]のことを是非いっておきたい。

戦前の野呂栄太郎他編の『日本資本主義発達史講座』[20]がコミンテルンの32年テーゼを分析の基礎にしたように、戦後の『日本資本主義講座』はスターリンの手になる51年綱領がそれに相当するものであった。これは前述のように荒唐無稽の代物であったが、それを真理と前提して、その「科学的」論証を試みたのが、この戦後の「講座」であった。良心的マルクス学者が喜び勇んで、学者としての最高の誇りをもって執筆に当たった。今から思うと、滑稽なほど奇怪な現象であった。

スターリンが死に、朝鮮戦争が停戦・休戦状態に入るに及んで、新綱領も意味を失い、したがっ

て「講座」も権威失墜し、ただの紙屑同然と化した。わずか1、2年の寿命だった。執筆者の一人、農業経済学者として夙に令名高かった井上晴丸氏が、岩波書店通用門のところで、魂の抜けがらのように呆然として人に支えられながら歩いてゆくのを、私は見た。痛々しい姿だった。

さて次に、最初にいった爆弾のもう一つ、朝鮮戦争である。コミンフォルム批判と朝鮮戦争、この二つは一連一体のものだったのだが、それを私が知ったのはずっと後になってのことである。

朝鮮戦争は、私はてっきり南が、韓国軍と在韓米軍が戦争の火蓋をきったと思った。その年（1950年）の六月、米国防長官ジョンソン、統合参謀本部議長ブラドレー、国務長官特別顧問ダレス、この3人が相ついで来日する、その数日後である、38度線全線で南北が戦闘状態に入ったのだったから。反ソ反共のアメリカが、とうとう平和の仮面を脱ぎすてて帝国主義の本性を現わした、と私は思った。歴史の事実は逆で、戦争は実はスターリンの指令で始まったのだった。新綱領も、そのための後方兵站基地攪乱を目的とするものであった。こんなこと今では周知の常識であろうが、当時の私たちには想像もできないことだった。ただただ不明を恥じるのみである。

どちらが先に発砲したか、北か南かの問題は別として、北が人民のため平和のための解放勢力であり、南がアメリカ帝国主義に操られた傀儡政府だという理解は、戦後を通じての、かなり後までの、左がかった私の立場からの当然の結論だった。私だけではない、アメリカの新聞記者I・F・ストーンの現地報告『秘史朝鮮戦争』[21]なども雪崩を打って南進する北を解放軍と報じていた。間違いは私一人ではなく、世界中の左翼に共通する間違いだったようだ。

この戦争は、半島の南北双方に深い傷痕を残したことはいうまでもないが、生まれたばかりの中華人民共和国にとっても、国の存亡にかかわるほどの大打撃だった。戦線は鴨緑江を越えて中国東北部へ拡大されようとしていた。トルーマン政府の不拡大方針、マッカーサーの罷免によって、それは実現こそしなかったが、中国は義勇軍投入という背水の人海戦術をとって北の防衛に当たらなければならなかった。甚大な犠牲を強いられたわけだ。もはや「新民主主義」などと悠長なことをいってはいられない。急速に社会主義化を強行しなければならない、それも、絶対必要となったソ連の援助を得るため「向蘇一辺倒」のソ連型社会主義である[22]。

こうして、私たちが新風と感じて希望をよせた牧歌的な「新民主主義」は、生まれたばかりで鉄火にさらされ葬り去られたのである。その後は、大躍進一人民公社一文化大革命とつづく不幸な一路を追いたてられていくことになるのである。

とすると、第二次大戦での人民の勝利をゼロにしてしまったのは、アジアの東部では、あの1950年のコミンフォルム批判と朝鮮戦争だった、ということになる。

*

ベルリンの壁が東西両ドイツの人民の手によって歓呼のうちにぶち壊された。毛王朝は土崩した。ソ連邦は瓦解した。

見たか、要するに社会主義・共産主義が間違いだったのだ、と勝ち誇っていう人がいる。いや、共産党が真の共産党でなかったからだ、と未練がましくいう人がいる。私はどちらにも組しえない。共産党の特権的独裁体制には私も反対で、だから、その土崩瓦壊と東西冷戦構造の終焉には二度目の解放感を味わった一人であるが、東の自滅の原因は社会主義・共産主義にではなく、もっと手前の、もっと卑近な、人間性の基底的モメントにあるのではないか、と私は思う。これは私の直接の体験からの結論である。以下それを断片的に簡単に述べて、この稿を終わるとしよう。

前に述べたように、私は戦後まもない頃入党した。スメドレー女史ほどではないが、党の指導者たちは嘸や立派な人ばかりだろうと思っていた。それが、美事に裏ぎられた。みんな、殆どみんな卑小な俗物ぞろいだった。

平党員だったので、党のお歴々に直接おつきあいする機会はなかったが、でも選挙の演説会のときなど、下足番のような役目はしていたから、その程度の浅い接触はあった。そんなことからの皮相な印象の限りでの話である。

袴田里美はおどけているのかと思うほど威張るし、岩間正男は何処へ行っても自己宣伝ばかりだし、志賀義雄は権威主義だけの底の浅い野心家、

伊藤律は小才のきく利巧者で女性関係の噂が絶えず、といった調子である。唯一の例外は春日庄次郎さん。彼だけは、思想的にも人間的にもコムニストの模範といえる人物だった。

これは後日の話であるが、志賀義雄について一つ付け加えておこう。彼が「日本のこえ」の組織に取りかかった頃のことである。志賀と私との二人の対談が企画された。高島喜久男さんの斡旋だったと思う。

その日志賀は精一杯背筋をのばしコチコチに緊張してやって来た。それが私には、不思議にも滑稽にも感じられた。そんなつまらないことは憶えているのに、肝心のそのときの対談内容は忘れてしまった。わずかに私が、「党の名に価する新しい党の結集は、これが最後の機会だ、今度失敗したら、万事休す、ソ連派とか何派とかいった小さなセクトになるだけだろう」と、そんな意味のことをいったように記憶している。志賀は「形式はゆるやかに、内容は厳格に」だったか、その逆の「形式は厳格に、内容はゆるやかに」だったか忘れたが、そしてその意味もよく理解できなかったが、そんな方針でやるつもりだと応えた。それから「他人のズボンに脚を突っこもうとするような奴は絶対に許さない」ともいった。これははっきり憶えている。私は、あゝこれでは駄目だ、共産主義党も終わりだな、と思った。

世間ではもう忘れてしまったことだろうから一言しておくが、「日本のこえ」という政治組織は、中国とソ連との対立のなかで、ソ連ばなれ・中共寄りに、それから自主独立になった代々木共産党に対抗すべく、あるいはそれに取ってかわるべく、ソ連大使館筋の指導のもとにつくられたもので、志賀がその最高指導者としてソ連からお墨付きを戴いていた。

その組織拡大のための工作の一つが、私も関係していた日本唯物論研究会とソ連哲学アカデミーとの交流会議の企てであった。交流を恒常的にするため、その下相談を兼ねて、大井正・森信成・私の3人が最初に訪ソした。1964年末～65年初のことである。

モスクワでのその会議の席で、私たち3人がどんな報告をしたか、どんな討論をしたか、それもみんな忘れた。ただ、私が、「日本のこえ」は日本では、あれは「モスクワのこえ」だといわれているといったとき、一座が騒然となったこと、これだけははっきり憶えている。大井・森両君が慌てて何やら弁明的なことを声を大にして発言して話題を転じ、その場はそれで収まって事なきをえたが、今にして思えば冷汗ものだ。「モスクワのこえ」なんていっては、何も彼もぶち壊しではないか。そんなことさえ、私はわかっていなかったのである。

その他、モスクワでの思い出を個人的なことなど思い出すまま順序不同で述べておこう。

中国を忘恩と罵る声は到る処で聞かされた。あれほど援助してやったのに、というのである。フルシチョフが政権の座を追われた直後だったので、スターリン批判をやってのけたフルシチョフへの我々の共感と称賛に対しては、彼の内政上の失敗を挙げて激しく反駁された。フルシチョフ支持の声は全くきかれなかった。ジダーノフ時代に一時影の薄かったミーチン老教授は、スターリン批判の後遺症か、元気がなく憂鬱そうな印象だった。片山潜の息女片山やすさんは、どんな権力的地位にあったのか知らないが、威勢がよかった。「日本のこえ」に馳せ参じないでグズグズしている連中、春日庄次郎さんたちを叱りつけるようなことをいっていた。同席していた岡田嘉子さんは殆ど無言で暗い表情だった。杉本良吉のことで自責の重圧にずっと堪えて来たためだろうか。カトリック哲学の松本正夫さんが絶讃していたコズロフスキーさんにも会った。西田哲学専攻の若い哲学者で、日本語は達者、我々のための通訳の労をとってくれた。恋人のことまで遠慮がちに話すほんとに気のいい青年だった。大学教授級の知識人が、日本ではマルクス主義の研究教育は禁止されていると思いこんでいたのには驚きだった。森君が、自分などマルクス主義哲学以外は一切講義していないといったら、信じられないといった表情だった。ソヴェト作家同盟の誰だかが、遠藤周作の『海と毒薬』[23]について、その文学的迫力を認めながら、しかも、何故こんな日本人の恥になるようなことを日本人自身が書くのか、その気持がわからない、といったのにも驚いた。いや、驚く方が間違い、ソヴェトでは文学は宣伝文学でなければならなかったのだから。

個人としてはみんな底ぬけの好人物ばかりだった。そのうえみんな酒豪ときている。申し分なしだ。にも拘わらず、制度としては牢獄同然。なぜだ？　人間は教育の産物だ、という性善説に従って、悪や罪はそのすべてが制度と教育に原因があると思いこんでいた私にとって、これは本当に驚きだった。驚きというより痛烈な打撃だった。私は大きな疑問をかかえて帰国した。

まだまだあるが、話をもとへ戻すとしよう。

幻滅だったのは、党の指導的地位の人たちだけではない。職場や居住の細胞レベルの人たちにもずいぶん非道いのがいた。

私の居住の町で『アカハタ』係りをしていた年輩の党員がいた。風丰がレーニンに似ているので、町の名をとって○○レーニンと呼んでいた。この和製レーニンが、こともあろうに、『アカハタ』の紙代を集金して、そっくり持ち逃げしてしまった。

神田の駿河台に民主主義科学者協会の事務局があった。書籍やパンフレットなど直売していた。その売上げ金が毎日、目減りする。事務局専従の青年某が退職して以後、目減りはピタリと止まった。

某大学の某教授は、説得力ある弁舌で正論を吐き教授会を牛耳っていた。歴史の浅い大学だったので、父兄後援会の協力を得て、全国的に広報活動に力を入れなければならなかった。夏休みには父兄後援会の役員とともに教員職員総出で手分けして地方まわりをした。そうした機会に、その某教授は夜の接待を後援会役員に要求するのだった。教授会での正論からは想像もできない下品な要求だった。

ある老舗の出版社は、組合が共産党のめっぽう強い会社だった。組合の役員選出など党細胞の意のままなのはいうまでもない、組合の圧力で社内人事も或る程度左右できた。会社側も組合対策としてそれに応じる姿勢だった。そんな条件が与えられていたからだろう、党員社員の社内出世慾は浅ましいばかりだったし、反日共的傾向の社員への敵意妨害は陰険にしてかつ露骨だった。

そんなこと、どれもみんな世間にごくありふれたこと、驚くに当たらない、とおっしゃるのか、そのとおり、私もそう思う。

だが、私がいいたかったのは、だから社会主義は失敗したのだ、ということである。マルクス主義の階級闘争史観では、こうした人間性の問題は問題にされない。社会主義権力が樹立されれば、そんな問題は自然に雲散霧消する、問題は唯一つ、階級敵の打倒のみ、これがすべてを解決する、という社会主義だったからである。問題のもう一つの側面、人間性の問題が無視されていたのである。

この点に注目して、ブルジョア社会は人間を「欲望の体系」と捉えて自由放任を提唱し、政治権力をできるだけ小さくしようとした。安価な政府（cheap government）である。社会主義は、ブルジョア社会の自由主義が結果する弱肉強食の弊害を克服するために、大きな政府・強い権力が必要であった。しかしそれが特権化することのないように、こうした人間性への洞察に基いての制度的歯止めが工夫されねばならなかった。そんな歯止めがあって始めて、人間性そのものが徐々に変わってゆき、いつか権力欲・名誉欲といったものがおもちゃの勲章と化して、子どもの遊びだけに残存する、という風になる、そんなことが期待できるのではないか。

そんなこと夢ではないか。否々、社会主義・共産主義の理想を忘れないかぎり、夢ではないと私は思う。そう思うことが、現在の私にとっての救いでもある。現に、障害者を教育の場から排除する時代は、もう終わろうとしているではないか。これは、その確かな一道標だ。

＊

戦後50年を省みて、となると、まだまだいわねばならないことが沢山ある。（例えば、あの全共闘さわぎ、あれは中国の文化大革命のサル真似、その矮小化日本版だった）。しかし、これ以上は、いえばいうほど「懺悔そのひとつ手前」[24]のつもりが、それどころか、逆に自己弁護、他者批判の方へ行ってしまいそうだ。それこそ一番みっともない、懺悔すべき点だった筈なのに。

（せきど　よしみつ　名誉教授）

（1996. 2. 3　受理）

註

1）Charles Vildrac: Russie neuve. Paris, 1937. 渡

辺一夫訳、1946年、酣燈社刊
2）André Gide: Retour de l'U. R. S. S. Paris, 1936; Retouches à mon Retour de l'U. R. S. S. Paris, 1937. 小松清訳、新潮文庫
3）前掲『新しいロシヤ』204頁
4）串田孫一・二宮敬編『渡辺一夫・敗戦日記』1995年、博文館新社刊
5）同上、104頁
6）佐伯陽介『紅い銀杏並木』1987年 彩流社刊、203～4頁
7）新島淳良編集発行、月刊『墳』67号、1995年12月
8）Edgar Snow: Red Star over China, 1937. 宇佐美誠次郎訳、筑摩書房刊
9）Agnes Smedley: Battle Hymn of China, 1943. 高杉一郎訳、みすず書房刊
10）Agnes Smedley: The Great Road, the Life and Times of Chu Teh. 日本語版、岩波書店刊
11）F. Engels: Ludwig Feuerbach und Ausgang der klassischen deutschen Philosophie, 1888.『マルクス＝エンゲルス選集』第8冊、1955年、大月書店刊
12）同上、53頁
13）飯島宗享訳、創元文庫；斉藤信治訳、岩波文庫
14）Franz Borkenau: Der Übergang vom feudalen zum bürgerlichen Weltbild. Paris, 1934. 水田洋他訳『封建的世界像から市民的世界像へ』1965年、みすず書房刊
15）Max Weber: Wissenschaft als Beruf. München, 1919. (Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre., Tübingen. 1922, SS 582～613). Engl. transl. by H. H. Gerth & C. Wright Mills: Science as a Vocation (From Max Weber. New York, 1949. pp. 129～156); 尾高邦雄訳、岩波文庫
16）木村浩訳、新潮文庫
17）木村浩訳、新潮文庫（全6冊）
18）1952年、東京大学出版会刊；続編、1953年、同刊
19）全10巻別巻1冊、1953～55年、岩波書店刊
20）全7巻、1932～33年、岩波書店刊
21）内山敏訳、1952年、新評論社刊
22）前掲『墳』同号参照
23）講談社文庫；現代日本文学大系、87、筑摩書房刊
24）本稿は『人権と教育』22号（1995年5月社会評論社刊）に「懺悔そのひとつ手前」と題して発表した拙稿の続編である。